

はってん 医学の発展のために

のろげんじょう 野呂元丈

江戸時代、本草学という学問がありました。本草学とは薬草を基本として、樹木・鉱物・動物など天然物全体にわたり種類・性質・分布や生態を研究し、記載する学問である博物学の基礎となったものです。本草学は、庶民の生活に役立つ学問として、なくてはならないものでした。

紀州藩主徳川吉宗が八代将軍になり、武芸と実学（実践で役立つ学問）が奨励されるようになると、多気町波多瀬出身の野呂元丈が幕府に取り立てられました。元丈は、幕府お抱えの本草学者として活躍しました。元丈は仲間と一緒に全国各地へ薬草採集の旅を続け、草木を研究しました。元丈は医者でもあったので、病人にとっての薬草の必要性を十分に理解していたのです。また、日本最初の狂犬病に関する治療法を説いた医学専門書を著しました。

47歳の時に、元丈は御目見医師（将軍に直接会える医師）に任用され、幕府の中で安定した地位を得ました。

将軍吉宗は西洋の学問に着目しますが、当時、江戸にはオランダ語を理解する幕府の役人はいませんでした。そこで吉宗は、青木昆陽と元丈にオランダ語の習得を命じています。二人は西洋の学問の研究をしました。これが日本の蘭学の始まりです。



野呂元丈（多気町教育委員会提供）

科学の発展のために

学習のめあて

野呂元丈は、20歳のころ、京都に出て、当時最先端の医学を学びました。また、医学に役立つ本草学も学び、熱心に研究に取り組みました。その後、医者や本草学者として活躍し、薬として効果がある草木を求めて日本各地を訪ねたり、狂犬病に関する医学専門書を著すなど優れた業績を残しました。

時の将軍吉宗は、庶民の生活の向上につながる実学を重視し、そのため西洋科学の知識や技術の導入を進めようとしていました。吉宗は儒学者であった青木昆陽と元丈に、オランダ語の習得を命じました。元丈は10年余りの歳月をかけて『阿蘭陀本草和解』を著し、青木昆陽とともに、日本における蘭学研究の始まりの人物とも言われています。

江戸時代に、元丈ら本草学者によって積み上げられた日本本草学の成果は、その後、生物学、薬学という名の学問に吸収されましたが、明治以降の日本の研究に役立ったとされています。

鎖国をしていた日本において、苦勞して翻訳作業を行った元丈の業績について話し合ってみましょう。また、我が国の科学・技術などの発展につくした、元丈の生き方について考えてみましょう。

考えてみよう

- 1 野呂元丈は、どのような学問や仕事をしていたのでしょうか。
 - 2 野呂元丈が、将軍吉宗から青木昆陽とともにオランダ語の習得を命じられたのはなぜでしょうか。
 - 3 医者であった野呂元丈が、本草学や蘭学を学んだのはなぜでしょうか。
 - 4 長い時間をかけて医学や科学の発展につくした野呂元丈の生き方について、どのように思いましたか。話し合ってみましょう。
 - 5 本草学のように、現在の学問や科学・技術などに生かされている、先人の業績について調べてみましょう。
- ☆ 第1部の「見つめよう わたしのふるさと そしてこの国 (P104～107)」を活用し、伝統や文化を自分の生活や将来に生かしていくことについて考えてみましょう。

らんがく めば
蘭学の芽生え

当初は貿易に限られていた交流も、しだいに知的な方面に進みました。オランダ船で輸入されたものには、オランダ語の書籍もありました。これを通じて江戸時代の日本人は、西洋の学術「蘭学」を学ぶこととなります。

蘭学の芽生えは8代将軍徳川吉宗の時代です。1720（享保5）年禁書令をゆるめてキリスト教に関係のない書物の輸入を認め、1740（元文5）年ころから青木昆陽、野呂元丈にオランダ語を学ばせるなど、海外知識を積極的に取り入れようとしていました。

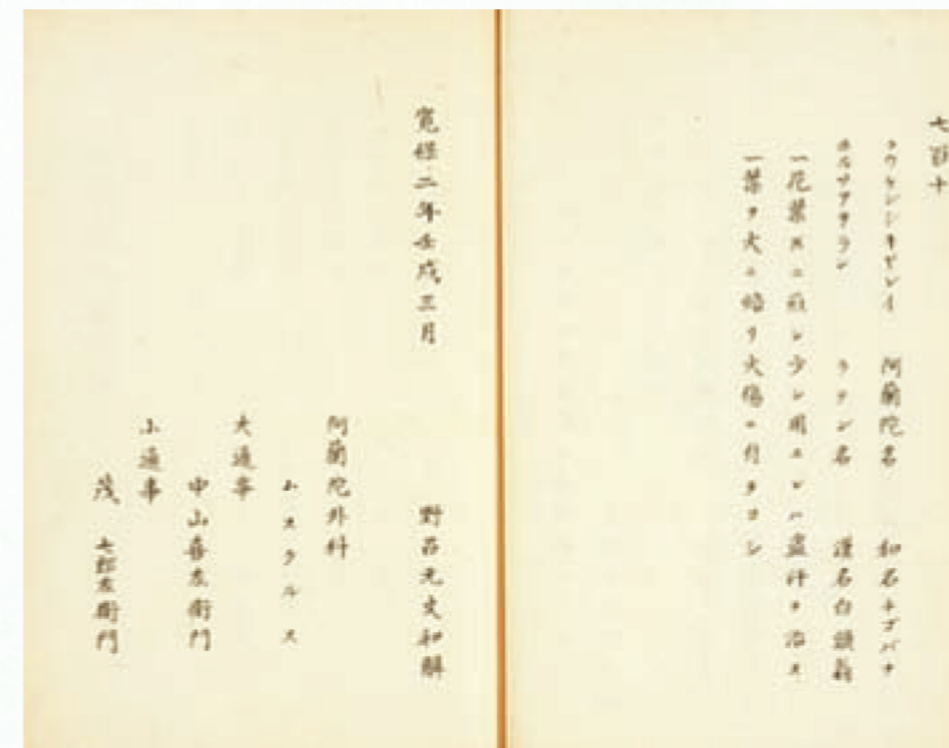
これより先、1659（万治2）年にドドネウスの『草木誌』、1663（寛文3）年にヨンストンの『動物図説』が商館長から献上されていましたが、解説できる人がおらず、空しく幕府の文庫に眠っていました。吉宗はこれにも関心を示し、翻訳を命じました。野呂元丈がオランダ人に質問し解説を試みた成果は、『阿蘭陀本草和解』などとして残っています。

この両書が、わが国の学術に広く影響を与えた最初の洋書といえます。特に『草木誌』は、西洋植物学書の代表として、日本の本草・博物学にも大きな影響を及ぼしました。



ドドネウス『草木誌』図版の模写
「ドドネウス和蘭本草和解」

国立国会図書館Webページから作成



野呂元丈訳のドドネウス『草木誌』
「阿蘭陀本草和解」

国立国会図書館Webページから作成

らんがく せんくしゃ のろげんじょう
蘭学の先駆者・野呂元丈

元丈は、まず手始めにヨンストンが著した『動物図説』の和訳本『阿蘭陀禽獣虫魚図和解』をまとめ、その後十年余りの歳月をかけて主著『阿蘭陀本草和解』を著しました。また、その間にも薬草研究や『朝鮮人筆談』等の著述を残し、一方で幕府の医官としては寄合医師二百石取りに昇格しています。

出典：「わたしたちのふるさと勢和」（勢和村）